

# 古田足日



(撮影 伊藤英治さん)

市民のみなさんは、四国中央市出身の古田足日さんをご存知でしょうか？

評論家で児童文学作家でもある古田さんは、多くの児童文学を出版し、その作品は多く子どもたちに愛されています。

今回は、古田さんの児童文学に込めた想いと、代表作品の一つ「月の上のガラスの町」を紹介します。

ないのかもしれない、というところが出発点でした。

子どもの行動や心理を丁寧に描いている中で、自然にメッセージを伝えたことが子どもの共感を得たのであり、一方の大人にとっても、型にはまった良い子どもの姿ではなく、新しい魅力を持った、時には悪い子どもを生きた提示したことが、長く読まれてきたのだと思います。

■代表作 「月の上のガラスの町」(2010年日本標準発行)を紹介



できました。はれた夜、地球から見ると、月はむかしより、もっとやえやえと、かがやいていました。※同本より抜粋  
このガラスの町でおこった6つのものがたり。

- 西からのぼる太陽
- あくまのつばい
- アンドロイド・アキコ
- 十二さいではいれる大学
- 月の花売りむすめ
- 巨大な妖精

地球から来た子どもと月生まれの子どもが月の大地を駆け回り、ゆううつな日々を過ごす大人は抜けたあくまと取引して、地球からきた女の子のロボットは真実の愛を求め、子どもに勉強ばかり求めた母親は子どもが子どもらしくあることのありがたさを学び…

月を舞台に社会批判、恋の物語、親子・家族の物語が繰り広げられます。

この本を原作にしたミュージカルが10月3日(土)・4日(日)に土居文化会館(ユ一ホール)で開催されます。演じるのは8歳から61歳まで、幅広い年齢層の公募市民のみなさんです。文字から飛び出した世界が舞台で音鮮やかに表現されます。

みなさんもちよっと一息ついて、秋の夜長を楽しんでみませんか？

※市内の各図書館にて古田さんの著書の企画展を開催中

問い合わせ 文化振興課 28・6043

## ■略歴

古田足日さんは1927年11月29日、国文学者の古田 拓(ひろ)さんの次男として川之江町で生まれました。

1953年、早稲田大学中退。1960年に「現代児童文学論」で第9回日本児童文学者協会新人賞を受賞しました。1967年に「宿題ひきつけ株式会社」(理論社)で第7回日本児童文学者協会賞を受賞。1981年「さくらんぼクラブにクロがきた」は第27回青少年読書感想文全国コンクール課題図書に選ばれました。そのほかにも「おしいれのぼうけん」(童心社)、「大きい1年生と小さな2年生」(偕成社)などの多くの作品を発表しました。

1997年から2002年まで日本児童文学者協会会長を務めました。

2014年6月8日、心不全のため86歳で逝去。

## ■本に込めたメッセージ

古田さんの本には一貫して流れる明確なメッセージがあります。それは「疑うことの大切さ」と「自由という価値観」です。「大きな1年生と小さな2年生」では、引込み思案で、自分では何もできないと思いついている主人公が、自分の可能性に気付き、自分で成長していく様子が、きめ細かに書かれています。

また、今でも人気の高い「おしいれのぼうけん」では、押し入れでの冒険でわくわくするストーリーを背景に、自分で考えて行動することの大切さが埋め込まれています。

「宿題ひきつけ株式会社」では、ほかの生徒から宿題を引き受ける会社を作った子どもが主人公です。宿題は自分でやるもの、という当たり前と考えられていることが、実は当たり前では

むかし、むかしのはなし…ではありません。未来のはなしです。いまから何百年かのこと、月の上にガラスの町ができていました。つよくて、うすくて、すきとおるガラスと、プラスチックのやねを何枚も、何枚もかさねあわせた、大きなドームの下にすっぽりと町がはいつていました。ドームの下にマンモス・アパートがあり、空気製造工場があり、農園がありました。このガラスの町では、草は見あげるほど背が高く、木はみんないまの地球のテレビ塔ほどの高さになりました。だが、引力が小さいからだもかるくなるので、子どもたちは、その見あげるほどの高さの草をとびこえることが